

しぜん訪ねて

今回は **不動七重の滝**について YYさん（7期生）より



前鬼川

ターコイズブルーに輝く

紀伊半島を貫く大峰山脈の縦走路（吉野山の蔵王堂から大峰山脈を縦貫し熊野本宮に達する）が**大峰奥駆道**である。

役小角（エンノオズヌ）が開いた大峰奥駆道は、1300年の歴史がある。役小角の弟子で**前鬼**という行者がいて、その子孫が暮らした地が「前鬼」と呼ばれる。

この地には前鬼山があり、この山を水源として**前鬼川**が流れているが、この川は透き通ったターコイズブルー（**前鬼ブルー**と呼ばれる）で実に美しい川である。この川の源流域に「日本の滝百選」に選ばれている**不動七重の滝**がある。文字通り、七重の滝であるが、総落差は160m以上と言われている。

不動七重の滝は、奥駆道では、**釈迦が岳**（標高1800m）から前鬼に降りてきたところから見える。一方、大阪方面から滝を見に行くのは、国道169号の前鬼橋（下北山村）から林道に入り、前鬼川に沿って川を30分程（車で）遡ったところに展望台がある。ここからは、前鬼川の対岸に滝が見える。滝を近くで見るには、展望台の手前から前鬼川に下り、橋を渡り、川を少し遡り、そこから幾つもの鉄梯子（合計1000段？あるらしい、結構きつい）を登ると、ほぼ滝の中間部に出て、間近に滝を眺めることができる。山好きな方には、是非一度訪れて頂きたい滝である。



不動七重の滝

（3段目と4段目）

野の花このごろ

今回は **早春に咲く野山の花たち** について MKさんより



セリバオウレン



ユキワリイチゲ

2月に入ると、早春の花が咲き始めます。河内長野の「花の文化園」では**スプリングエフェメラル**（春の妖精）と言われる山吹色の**フクジュソウ**や可憐な**セツブンソウ**の花が開き始めますが、残念ながら南大阪府内に自生地は無いようです。

金剛和泉山系の林下では、真冬でも**サツマイナモリ**（アカネ科の多年草）が白い漏斗状の花を咲かせていますが、2月の中頃になればキンポウゲ科の**セリバオウレン**が春一番とばかり咲き始めます。名前の通り葉はセリによく似て、白い放射状の花弁を持つ可憐な花で、身近では錦織公園でも見ることができます。2月の下旬になると**ユキワリイチゲ**や**ミスミソウ**の花が咲き始め、**ショウジョウバカマ**、**カタクリ**、**ニリンソウ**等のスプリングエフェメラルが順次咲き始めます。

スプリングエフェメラルとは、早春の短い期間に落葉樹の林間から顔を出し、花を咲かせて、夏まで葉をつけると

あとは地下で過ごす草花の総称ですが、**ショウジョウバカマ**や**ミスミソウ**は常緑多年草であってもその仲間で、なぜかセリバオウレンは入っていません。どうも分類学上の明確な定義は無いようです。

なかでも**ショウジョウバカマ**は**特異**です。生態分布が平野部から高山帯までそれも全国に広く分布しており、あらゆる環境に適応するほかに、開花後に花茎を更に50cmほど伸ばして頭頂に種を付け、風を受け飛ばす有性繁殖に加えて葉の先にラメットをつくり栄養繁殖もします。生き残りへの確かな強かさを感じます。また、**シロバナショウジョウバカマ**は金剛和泉山系でよく見かけますが、全国では南近畿に集中分布する貴重種です。今冬山に春をさがしてみても如何でしょう。



ミスミソウ

（ユキワリソウ）



ショウジョウバカマ



私は講座終了後吟行部会に入り俳句を始めました。

松尾芭蕉の名句「夏草や兵（つわもの）どもが夢の跡」には、義経主従や奥州藤原一族の者たちが功名や栄華を求め、そして滅びた情景が、僅か17文字に凝縮され物語として完結していることに俳句の魅力を感じ触発されたのです。

吟行部会入部当初は「季語無し、季重なり」も知らず駄作を重ねておりましたが、3年前、帝塚山学院大の「学生のための俳句講座」（夏井いつき客員教授）に聴講参加して俳句のイロハを教えていただきました。以降一句だけですが、夏井先生や黒田杏子先生（夏井先生の師匠）に褒めて頂いた句があります。

東日本大震災が日本を襲った年の翌秋、被災地の現状を自らの目で確かめたく、学生時代の仲間4人で女川港や石巻市大川小学校を訪れました。

大川小学校は児童と先生の計84名が一瞬にして津波の犠牲になった悲劇の小学校です。

学校は海から5km以上離れた北上川沿いの田園にあり、河畔からも200mも離れています。こんな遠くまで津波は襲ってきて、校舎のコンクリート壁すら無残に破壊され鉄筋が曲がりくねって露出していました。

校庭には犠牲者を弔う慰霊碑が建てられ多くの花が添えられていて、私たちは言葉もなく黙禱を捧げ続けました。

私達が訪れた時の北上川は平穏で、土堤の草原の所々に小さな花が咲いていました。津波の前日には、この土堤で生徒たちが楽しそうに土筆を摘み、先生も優しく見守っていたのではないかと、そんな情景が胸に浮かびました。

その子たちはどうなってしまったのか。

一昨年、黒田・夏井両先生主催で「東北お遍路コンテスト」と銘打って、東日本大震災に関する俳句の募集がありました。

私は当時の情景を思い起こし、句を詠んで応募しました。

「前日の三月十日土筆（つくし）摘む」

この句は最優秀賞に選ばれ、その上に黒田先生の講評は更に嬉しいものでした。

「この句の真実作者だけのもの。俳句という一行十七音字のミニマムな詩形。

そこには長編小説も及ばないマキシムな世界が・・・」（黒田杏子評）

まさに私が芭蕉の俳句に感動し目指したところです。

ただ、後にも先にもこの一作だけ。他は駄作ばかりですが、今も吟行部会で俳句を楽しんでいます。

大川小学校/校庭慰霊碑



里山だより

寒中を迎えた里山の様子

MAさんよりのお便り

小寒（1/5）～立春（2/3）は年間で一番寒い時期で寒中と言われます。里山にも1月12日に雪が降りました。

少しの雪でも里山の雪景色はどことなく絵になりますね。大地も潤いました。

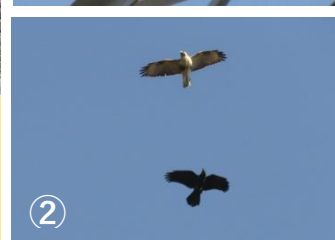
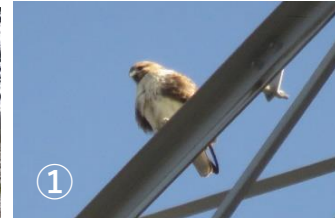
この時期、ミカン山の仕事はミカンの木の

剪定です。剪定をすることで、すべての枝葉に太陽の光が当たり、風が当たることで、

病害虫を防ぎます。無農薬栽培をしているので、剪定作業はとても大事な作業です。



里山の雪景色



こんな光景に出会いました。

①ノスリが鉄塔で寛いでる

②カラスがやってきて追い立てる

③2羽で追われノスリ退散



剪定前・葉が密集



剪定後・光と風が行き届く

剪定

放射冷却で冷え込んだ朝。庭に顔を出した小さな草たちは表面に霜を付けキラキラ光っています。すぐその横で寒さに耐え、実を付けていたミニトマトは、霜が降りた途端、葉はしおれ、再起不能。この違いは何？細胞に氷の結晶ができると、細胞内の構造物（小器官）は破壊され、致命的なダメージを受けます。夏の作物、トマトは細胞が氷晶で壊され、致命的な傷を負ったのです。一方寒い冬を越す植物たちは、秋から冬支度をし、細胞を凍らせない為の仕組みを持っています。日が短くなり、気温が下がってくると、植物は細胞内に糖やアミノ酸、蛋白質を蓄えます。（だから冬野菜は甘く、旨い!!）細胞を包む細胞膜も組成を変え凍結の変化を受け難くします。



霜を付けた草。氷晶には様々な顔がある。和泉市松尾寺町付近

更に細胞膜の外を包む細胞壁の存在も細胞内氷結防止に役立ちます。0℃以下まで冷やされた空気中の水蒸気（過冷却）は、地面や植物などの表面に付着すると氷の結晶となり、これが霜です。次々と氷が表面に加わり霜が成長します。一方霜柱は、地表が0℃以下になると、地表面がまず凍ります。次に土中の水分が毛細管現象により吸い上げられ凍結、地表面の氷を押し上げます。それが繰り返されることによって、上に上にと氷の柱が成長し、霜柱となります。シモバシラというシソ科の植物があります。地上部が枯れた後も根は生き続け、水分を吸い続けます。気温がマイナスになると、毛細管現象で吸い上げられた水は地上茎からしみ出て凍り、次々と吸い上げられた水分が凍り付き、大きな氷柱に成長します。茎が強く導管のしっかりとしたシソ科植物で多く見られ、他にアキチョウジ、身近なものではサルビアがあります。

地表近くの霜柱。5日かけて成長

アキチョウジ茎に成長した氷柱。くるくる回って翻るスカートのように。金剛山で



南大阪昆虫記 昆虫部会のリレーレポート 今回は「厳冬期の昆虫探し」 1 1 期生 平谷計二さんです

いずみの国の自然館クラブで幼虫観察の基本を教わった後、オオムラサキやゴマダラチョウの生息地、槇尾山山間部へ幼虫観察に出かけました。

オオムラサキやゴマダラチョウの幼虫はエノキの葉を食草とし（*ヒオドシチョウ、テングチョウも食草）、深まる秋に自ら幹を下り、根元の落葉の中で越冬、春・若葉の季節に自ら幹を登ってさなぎになり、6月頃成虫となる。冬場はどちらも体長は2～3cm、茶系色だが、オオムラサキの幼虫は細身で背中に4対の突起、ゴマダラチョウの幼虫は丸っこく、3対の突起があり、その違いで見分ける。

根元の風当たりの弱い場所のやや湿り気のある葉を1枚ずつ1枚ずつ丁寧にめくり、じっくり観る。しかし、そう簡単には見つけれられない。



エノキの根元を覗き
幼虫を探す

オオムラサキの幼虫

ゴマダラチョウの
幼虫



いつの間にか、子ども時代にタイムスリップして、時を忘れ、夢中になる。「あっ!」「おっ!」ついにその時がきた。心が躍る。

槇尾山の5ヶ所で、十数回観察して、観察後は落ち葉も幼虫もそのままの状態での元の場所に再会を願って、そっと戻す。

6月には優雅に舞うオオムラサキやゴマダラチョウを観察できるだろうか？そう願いたいものです。



ツグミ



シロハラ

ツグミの仲間は約40種類で、前回紹介したジョウビタキ、ルリビタキのようなスズメサイズ（14cm）の小型ツグミ類（22種）とそれより大きいムクドリサイズ（24cm）の大型ツグミ類（18種）に分かれます。

大型ツグミ類の代表である**ツグミ**は冬期に全国各地に数多く飛来し、最も親しまれている冬鳥です。10月の下旬頃にシベリアから大群で海を越えてやってきて、12月に入ると山地から低地に移り小集団に、地上に降りて跳ね歩きながら餌を探すようになると単独で行動します。

シロハラもシベリアから群れで渡来する冬鳥ですが、越冬中は単独で縄張りを持って生活します。胸と脇腹の赤い**アカハラ**は東アジアから日本の山地高原へ渡ってくる夏鳥ですが秋から冬にかけて低地へ

渡ってくる冬鳥もいます。バーダーに人気のあるのが黒の斑模様がある**トラツグミ**ですが、冬は里山や公園でも見かける漂鳥です。

他にもこの仲間には夏鳥の**クロツグミ**や**マミジロ**、旅鳥の**マミチャジナイ**がいますが出会いは少ないですね。

最近は海岸部というより都市部で見ることが多い留鳥の**イソヒヨドリ**もこの仲間です。繁殖期以外は一羽で生活し、非繁殖期も縄張りを持っていますので、いつも決まった場所で出会えます。この仲間の特徴は渡りや移動は群れととなりますが、繁殖期以外は単独で行動し、ミミズや昆虫の幼虫を餌とするため、地上に降り立つことです。大きさも肉眼で確認しやすいので、比較的見つけやすい、見つけやすい鳥達といえます。



トラツグミ



クロツグミ

コロナ済んだら行きたいな！

「けん」の旅日記 ⑨

猿山岬の雪割草

2月（月末）～4月（上旬）

輪島市

ユキワリソウ



間垣で囲まれた集落

能登の自然の風物や人々の気質について「**能登はやさしや土までも**」とその優しさが謳われるが、能登・西海岸の冬は、言葉とは裏腹に厳しい。幾度となく北西からの季節風が吹き荒び、それは海からの波しぶきと空からの雪を伴って小さな集落を襲う。人々は**間垣**と呼ぶ軒先まで届く高い竹垣で屋敷の周囲を囲い、冬を耐えるとお聞きする。

雪割草（オオミスミソウ、ミスミソウなどの総称）もまた、根雪の下で長い冬を耐え忍び、雪解けをまって一気に弾ける様に咲き初めるといふ。花色の変幻する花で、多彩な色を纏い可憐に咲き乱れる。能登の方々はその花に、**再び春を迎えることのできた強い喜び**を感じられるのではないか、その感動のお裾分けに預けられないかしら・・・と能登を訪れた。

レンタカーを駆って、輪島市街から海沿いに間垣で囲まれた集落を抜け、断崖の中腹を縫う道を走ること1時間ほどで**猿山岬灯台**にたどり着く。灯台からは日本海を見晴るかす絶景。

そこから続く3～4KM程の山道の両脇が雪割草の群生地、健気な花が辺り一面咲いている。

花守さんと
ケン

歩みを止めては「**キミはまた、格別きれいだね。春が来たね、良かったね**」と花と語らう連続で、ちっとも先に進まないのだった。地元・門前町深浦地区婦人会の方お二人が、雪割草をイメージしたピンクの衣装に身を包み、花守をなさっていた。

お話を伺っているうちに、年嵩の方が「まんていい男じゃけえ」と仰り、私の腕を取って写真に納まって下さった。私も照れながらも満面の笑み。「まんて楽しく嬉しい一日」だった。

みんな夢 雪割草が 咲いていた （三橋鷹女）



(ユキワリイナゲ)